

## P-021

## 多職種と連携した患者のケアを通して

飯山赤十字病院 皮膚排泄ケア認定看護師

○小林 益美

【はじめに】今回多職種で関わった創傷ケアについて学ぶことが出来たので報告する。

【症例】S氏88歳。関節リウマチの為プレドニン10mg/日内服中。20XX年、右足背部の皮膚色変化と疼痛出現。外科的デブリードマンにて壊死組織除去後ステロイド含有軟膏によるケアが著効。退院後もサービス利用し創部のケアを継続、改善再発を繰り返し発症から5ヶ月目に治癒した。

【ケアの実際】皮膚欠損による疼痛は激しく夜間眠れないこともあったが、既にNSAIDsを内服している事や以前に内服薬の副作用があった事から鎮痛剤の増量や変更はされなかった為、医師と相談し創洗浄前にキシロカインゼリーの塗布を行った。ケア時及び夜間の疼痛も軽減した。創は上皮化と皮膚欠損を繰り返した為創の評価が難しく、病棟看護師はケア方法に不安を抱いていた。そこで週に一度スタッフと共に創部の写真を比較し、スタッフも創の評価が出来るようになった。退院前には入院時と同じケアが出来るよう患者のケアに関わるスタッフ全員にケア方法の実演指導を行った。訪問看護師にはケア時に創部の写真を撮影してもらいデイサービスのスタッフとも情報共有を行い、創部に変化がある時にはいつでも相談できる体制を整えた。

【考察】キシロカインゼリーを用いたケアで疼痛コントロールが図れ、患者と信頼関係を築く事が出来たと考える。またケアに携わるスタッフ全員がケア方法を習得し、創の評価が行なえるようになった事はスタッフの自信に繋がった。入院中に関わった皮膚排泄ケア認定看護師が退院後もケアする事で患者や家族、訪問看護師等の精神的安寧を図る事が出来た。

【まとめ】多職種で創傷ケアを行った。皮膚排泄ケア認定看護師が調整役として介入し患者やケア担当者の精神的安寧が図れた。

## P-022

## 当院におけるエアマットレス管理の現状

前橋赤十字病院 褥瘡対策室<sup>1)</sup>、前橋赤十字病院 管財課<sup>2)</sup>○清水 國代<sup>1)</sup>、大西 一徳<sup>1)</sup>、井田 浩之<sup>2)</sup>、清宮 崇之<sup>2)</sup>

【目的】褥瘡発生予防のために適切な耐圧分散寝具を使用することは非常に重要である。当院では平成22年度に全床ウレタンマットレスを導入し、高機能エアマットレス（以下エアマットレス）を50台配備している。しかし伝票で管理していたためタイムリーな運用状況の把握が困難であった。今回伝票運用から院内LANを活用した運用へ変更し、エアマットレスを効果的な運用ができるよう取り組みを行ったので報告する。

【方法】エアマットレスの管理方法変更後の平成24年7月から25年3月までのエアマットレス運用状況を調査した。

【結果】エアマットレス申込数462件、貸出数420件、キャンセルは44台であった。申込から貸出までの待機日数は平均2.06日であった。使用日数は平均24.7日であった。キャンセル理由は手配時に既に退院、褥瘡発生リスクが軽減、本人の希望などであった。エアマットレス待機数は最大で14件であった。使用日数は平均17日、最大185日で、1週間未満が22%、4週を超える使用は29%であった。

【考察】エアマットレス申込・貸出・返却を院内LANの活用により一元化、可視化したことで待機状況が病棟、褥瘡対策室、管財課で共有でき、使い回しなどのルール違反が減少した。また褥瘡対策室で褥瘡発生リスクから優先順位をつけることで、必要な対象にタイムリーに貸出することが可能となった。しかし褥瘡発生リスク患者が増加する冬期には待機台数が増加し、貸出が間に合わない状況があった。また4週を超える使用も29%あり適切な時期にエアマットレスを外すための働きかけも必要である。

【まとめ】院内LANを活用しエアマットレス管理を一元化、可視化したことで適切なエアマットレスの貸出しが可能となった。

## P-023

## 看護部倫理委員会のカンファレンス改善に向けての取り組み

山口赤十字病院 緩和ケア科

○小野 芳子

【はじめに】山口赤十字病院の看護部倫理委員会では、専門職として患者の権利を尊重した看護の提供を目的に活動している。「各部署のカンファレンスの充実が図れる」ことを目標とし、他部署のカンファレンスに倫理委員が参加し、問題点を明確にし改善できるように取り組んだ。

【方法】倫理委員にアンケートを実施し、目標評価をした。アンケートの内容は、カンファレンスに参加した感想、カンファレンスの現状・問題点、カンファレンスの改善策の3点とした。倫理的配慮として、アンケートは無記名とし自由意思で参加とした。

【結果・考察】倫理委員14名のうち委員長・副委員長を除く12名からアンケートの回答を得た。他部署のカンファレンス参加回数は1~3回/人であった。カンファレンスの感想は、多職種が参加したカンファレンスは充実していた、様々な工夫（時間、看護計画との連動、方法など）がされていた、みんなが意見を言える雰囲気づくりが大事などであった。自部署の問題点として、他職種の参加が少ない、タイムリーにできない、定着していない、計画性がない、発言しにくい雰囲気などがあった。自部署の改善点として、定期開催、定着させる、意識づけをする、意識を高める、少ない人数でもする、みんなが発言できるようにする、看護計画との連動、医師に参加してもらう、司会書記の役割を明確にする、テーマを絞ってカンファレンスをするなどが挙げられた。

【結論】他部署カンファレンスに参加することで、様々なカンファレンスの取り組みがわかり自部署と比較して問題点を明確化し、改善策を見出すことができていくことがわかった。カンファレンスは、情報共有・問題解決の場だけでなく、効果的なチーム医療提供の場にもなる。今後は、改善策を実行に移していくことで、カンファレンスの充実が図れるようにしていきたい。

## P-024

## 入退院が多い混合病棟における患者ニーズ調査～ナースコールの内容分析～

名古屋第二赤十字病院 循環器内科

○荒木由美子、芝田佳奈子、太田 省子

【はじめに】当病棟は混合病棟であり、短期入院と長期入院が混在しているうえ、入退院も多く業務が煩雑になっている。日常の看護業務に追われ、患者からの要求にスムーズに対応することが困難な状況にある。今回、ナースコールの発呼時間帯や内容、対応に要した時間等を詳細に分析し、患者のニーズを明らかにしたので報告する。

【方法】1当病棟に入院中の患者から発呼されるナースコールに対応する看護師27名を対象とし、患者が発呼したナースコールの回数、内容、ナースコールの対応に要した時間を調査した。2独自に作成したナースコール調査表を用いた。ナースコール調査表は、「排泄」「食事」「点滴」「薬」「処置」「清潔ケア」「その他」「センサー」の8項目のカテゴリーに分類した。3調査書は、ベッドサイドに1日1枚置き、患者がナースコールを押した際、その都度対応した看護師が必要事項を記載した。要した時間は、物品の準備から片付けまでとし、薬に関しては、内服や貼付するまでとした。4時間毎にナースコール件数、要した時間を単純集計し、カテゴリーに分類した。ナースコールの発呼時間、要した時間を集計して内容を検討し、患者の需要を分析した。

【結果】調査開始から1週間のナースコールの発呼総件数は1149件であり、対応に要した総時間は3822分であった。そのうち、排泄の発呼件数は650件で対応時間は2573分、食事は90件で240分、点滴は10件で34分、薬は41件で135分、処置は15件で37分、清潔は12件で63分、その他は223件で594分、センサーは108件で146分であった。排泄の発呼件数は、全体の56%を占め、対応時間も全体の67%と多くを占めていることがわかった。